

# 句読点は何を使いますか？

—— 。と、ですか？それとも . と , ですか？ ——

Which of the punctuation marks do you use for Japanese writing horizontally (from left to right)? There are two ways of writing in Japanese sentence, writing vertically or horizontally. When we write it vertically, punctuation marks are strictly decided as a rule, “。” (maru) just likes a period to be used at the end of a complete sentence in English, and “、” (ten) likes a comma to be used at the end of phrase. However, in case of Japanese writing horizontally, such rule is not strictly decided. In many cases, combination of “。” (maru) and “、” (ten) are used, but “。” (maru) and “、” (comma) or “。” (period) and “、” (comma) are also used specially in magazines, articles and papers of science or industry field. I recommend using the combination of “。” (maru) and “、” (ten) for the punctuation in Japanese writing horizontally for general instruction manuals.

有限会社 アトリエ・ワン

Atelier Bow-Wow

貝島良太

Ryota KAIJIMA

現在の製品マニュアルは、ほとんどが横書きである。縦書きの場合、句読点は「。(丸)」と「,(点)」を使うことになっている(「くぎり符号の使い方[句読法](案)」昭和21年3月文部省教科書局国語調査局)。これに異を唱える人は、まずないであろう。また、他の符号を使って書かれた文書を筆者は見ることがない。しかし、横書きでは、一般的に「。(丸)」と「,(点)」が一番普及しているが、「。(丸)」と「,(コンマ)」または「.(ピリオド)」と「,(コンマ)」の組み合わせもある。特に科学雑誌や学术论文、記事、辞書、辞典などで比較的多用されている。それでは、製品マニュアルには句読点にどの組み合わせを使うのが一番好ましいのかを検証してみよう。

## 1. はじめに

筆者は、マニュアル文執筆時における注意点を、2009年から1年に1テーマ、この場で研究発表をしている。今年はその6回目である。2009年のテーマは、「ください/下さい」の使い分け<sup>[1]</sup>、2010年は、助数詞「ka」<sup>[2]</sup>、2011年は、研究発表が中止。2012年は、ら抜き言葉<sup>[3]</sup>、2013年は、句点と閉じ括弧<sup>[4]</sup>、2014年は、接続詞の考察<sup>[5]</sup>であった。これらの発表論文は、<http://www.bow-wow.jp/sht3/data.html>の項番021から0

25に掲載してあるので、ご参照いただきたい。

さて、今年のテーマは、ほとんどの日本語の製品マニュアルで使用されている「横書きの文章における、句読点についての考察」である。

## 2. 句読点とは(定義)

「句読点」の定義については持論をはさむ余地はないと思う。国語辞書と百科事典の記載を引用することにする。とくに、百科事典の方は定義のほか、句読点の歴史や使用法など詳しい解説の記載があるが、本稿の目的

から乖離するので解説部分は引用を省略する。

《引用開始》

【スーパー大辞林】<sup>[6]</sup> くとてん[句読点] 文につける句点と読点(とてん)。ひとまとまりの文の最後に句点を、また、文中に読みやすく正確な理解を助けるために読点をつける。現在は普通、句点に「。」、読点に「、」を用いる。横書きやローマ字文では「.」、「,」などが使われる。なお、感嘆符「!」、疑問符「?」、中黒「・」、かつこの類など、表記上の補助符号も含めていうこともある。

【電子版世界大百科事典】<sup>[7]</sup> 句読点 書きことばに用いる〈まる〉(。または.)や〈くてん〉(、または,)などの符号。まるを句点、てんを読(と)点という。〈まる〉や〈くてん〉のほか、〈なかてん〉(使い方の例:名詞・代名詞 マネー・サプライ)、〈かっこ〉( ( ) )、〈かぎかっこ〉(「 」)、さらに、〈つなぎ〉(=)、〈つなぎてん〉(-)などがある。これらの符号の使い方(これを句読法という)については、文と文の切れ目に用いる句点のほかは、かなづかいのように、正書法としての基準は確立していない。

……以下省略

《引用終了》

以上引用した原文は電子版(横書き)で、句読点はいずれも「。と、」である。ちなみに、冊子版大辞林は縦書きで、使用されている句読点は当然「。と、」である。

### 3. 横書き句読点に関する国の規定

横書きの日本語で、句読点にどの種類のものを使用するのかを国が一般国民に対して明確かつ絶対的に規定したものは、見当たらない。しかし、それに準じたもの、すなわち、「教科書にはこう書くことにするけれど、よかつたら一緒にやりませんか」的なものはいくつかある。先鞭を切ったのは文部省(現文部科学省)である。まず、1946年3月に新仮名遣いの指導書(特に教科書用)的立場で出されたものが、第2次大戦後では一番古いようで、以来これが国の規定する正書法(と呼んでよいか定かではないが)の基になっているようである。

これは、当時の文部省教科書局調査課国語調査室によって発表されたもので、発表以来70年近く経過した現在も、公用文や学校教育その他で参考にされている場合が多い。この文書の現物(印刷物)の入手は困難だが、「言葉に関する問答集(総集編)」<sup>[8]</sup>に参考資料1として収録されていたので図1に示す。タイトルは「くぎり符号の使い方[句読法](案)」で、本文は全て縦書きである。

(一) 主として横書きに用いるもの		呼び名	符号	準	則	用	例
(1)	ピリオド	。	一、ピリオドは、ローマ字文では終止符として用ひるが、横書きの漢字交りかな文では、普通には、ピリオドの代りにマルをうつ(例12)。	1) 春が来た。		1) 春が来た。	
(2)	コンマ	,	二、テン又はナカテンの代りに、コンマ又はセミコロンを適当に用ひる(例3456)。	2) 出た。出た。月が。		2) 出た。出た。月が。	
(3)	コロン	:	三、引用符・ハイフンの用例は略す。半ガッコの用例は下欄で実地に示した。	3) まつ・すぎ・ひのき・けやきなど、		3) まつ・すぎ・ひのき・けやきなど、	
(4)	セミコロン	;		4) まつ、すぎ、ひのき、けやきなど、		4) まつ、すぎ、ひのき、けやきなど、	
(5)	カサネテン(中の大きく)	⋮		5) 明日、東京を立って、静岡、浜松、名古屋、大阪・京都・神戸、岡山、広島を六日の予定で見えます。		5) 明日、東京を立って、静岡、浜松、名古屋、大阪・京都・神戸、岡山、広島を六日の予定で見えます。	
(6)	テナコロン(中の小さく)	⋮		6) 静岡; 浜松; 名古屋; 大阪、京都、神戸; 岡山; 広島を		6) 静岡; 浜松; 名古屋; 大阪、京都、神戸; 岡山; 広島を	

図1 くぎり符号の使い方[句読法](案)の横書き用記載

ここでは、横書きの場合、句点は「。」、読点は「、」とするように規定されていて、用例でも「明日、東京を立って、静岡、浜松、名古屋、大阪・京都・神戸、岡山、広島を六日の予定で見えます。」のように使用されている(筆者注:用例中、「東京を立って」とあるのは、漢字をあてるなら本来「東京を登って」とすべきであろう。現在は表外読みなので「東京をたって」となるはずである)。

なお、この文書には、前書きのさらに前に、

《引用開始》

本省(筆者注:文部省のこと)で編修または作成する各

種の教科書・文書などの国語の表記法を統一し、その基準を示すために、

- 一、送りがなのつけ方(案)
- 二、くぎり符号の使ひ方〔句読法〕(案)
- 三、くりかへし符号の使ひ方〔をどり字法〕(案)
- 四、外国の地名・人名の書き方(案)

の四編を印刷に付した。この案はその一つである。諸官庁をはじめ一般社会の用字上の参考ともなれば幸いである。

《引用終了》

と記載がある。(案)であるから、改訂の有無はともかく、いずれ通達なりになって然るべきと思うが、そのような扱いはされておらず、70年後も(案)のままというのはいさか違和感を覚える。それはともかく、内容的には、「教科書で押さえておけば、いずれそれで教育を受けた子どもたちが大人になって、文書を作成する立場になれば、国中がその正書法で統一されるであろう」という気長な発想であったのかもしれない。

ただし、上記(案)発行から3年半後、文部省が自省内用に制定した「文部省刊行物 表記の基準」(昭和25(1950)年9月「付録」より)というのがあることが、「句読点、記号・符号活用辞典」<sup>[9]</sup>の参考資料として収録されている(図2)。

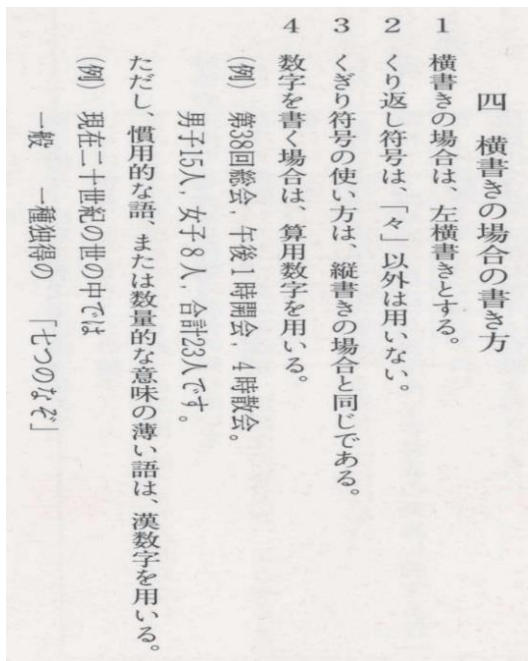


図2 文部省編「文部省刊行物 表記の基準」より

ここでも、横書き用句読点は、「。と、」を使用するように記載されている。

昭和26(1951)年10月に、国語審議会から内閣総理大

臣と文部大臣に宛てた「公用文改善の趣旨徹底について」という建議書(文調国369、昭和26年10月30日付け)が出され、これを受けて内閣官房長官が、各省庁次官宛にこの建議書を別紙として添付して、「公用文改善の趣旨徹底について(依命通知)」(内閣閣甲第16号 昭和27年4月4日付け)<sup>[10]</sup>を送達している。このとき添付されていた別紙「公用文作成の要領」の第3 書き方についての5の注に、

《引用開始》

2. 句読点は、横書きでは「。および、」を用いる。

事物を列挙するときには「・」(なかくてん)を用いることができる。

《引用終了》

とある。いずれも官公庁内部で、あるいは公用文で国民に示す文書の規定であり、民間にそれら規則を押しつけているものではないが、民間で同様な趣旨で表記の規則を作る場合、とりあえずベースにしておけば無難だということであろう。

次に、工業界の多くの技術者が、文書作成の参考あるいは基準としているJIS Z8301「規格票の様式及び作成方法」<sup>[11]</sup>を見てみよう。

発行は財団法人日本規格協会(JSA)だが、日本工業標準調査会が審議し、経済産業大臣が制定したものであるから、たとえそれが、規格票の作成のみを対象にした規則集だとはいえ、これを基準にして社内外の技術文書のみならず一般文書にまで適用している法人や個人は多いと思う。Z8301では、句読点の種類に関する記述は、G4 記述符号のところにある。

《引用開始》

## G4 記述符号

### G.4.1 符号の種類

文章の記述に用いる符号は、区切り符号・引用符号・連続符号・繰返し符号・省略符号・括弧とする。

### G.4.2 区切り符号

区切り符号には、句点“。”、コンマ“、”、中点“・”及びコロン“:”を用いる。これらの用い方は、次による。また、セミコロン“;”は、用いない。

a) 句点“。”の用い方は、次による。……中略……

b) コンマ“、”の用い方は、次による。……以下略……

《引用終了》

JISの規格票は、すべて横書きで、使用されている句読

点は「と、」に統一されている。どちらも文部省の決めに準じている。

#### 4. 横書き句読点に関する民間資料

ここで、Web上での検索結果を見てみよう。

Googleで「句読点 横書き」で検索すると、36,800件、「横書き 句読点」で検索すると、37,000件のヒットがある(2015/5/25現在)。上位ヒットの中で、筆者が秀逸だと思ったのは、「横書き句読点の謎」(A4全16ページのpdfファイル)<sup>[12]</sup>である。著者は九州大学の大型計算機センター・研究開発部にご在籍の渡部善隆准教授とある。本文はA(先生)とB(学生)の対話形式(といえ固くなるが、漫才のボケと突っ込み調で実に面白い)で書かれている。句読点の歴史(古文には句読点がなかったこと、前述の文部省の(案)以降横書きでは「と、」になっている話しなど)、さらに現代での使用実態に至るまで、実例を掲載しつつ、落ち度なく、ごく親切に解説している。著者の情報収集力と説明力に脱帽である。特に面白いのは、公用文書の代表格である官報、経済白書、外交青書や運転免許証などけっこう多くの公文書に「と、」が使用されていることが暴露されている。これを読んでも、Web検索でヒットした他のものは、多分読まなくてもよいと思える程である。ただし、この文書は、あくまでも解説であり、使用法を規定してはいない。

#### 5. 雑誌における句読点の使用実態

筆者は、製品マニュアルの読み手である一般消費者が、一番違和感がない句読点の種類を絞り込む手段として、彼らが日常接している活字の情報源である雑誌を調査することで見当が付けられると考えた。そこで、新宿区立四谷図書館に行き、同館所蔵の日本語雑誌194誌を対象に、本文の横書き部分に使用されている句読点の種類を調査した。(新聞は、大部分が縦書きで、本調査目的にはあまり参考にならないと考えたので調査対象から外した)

なお、前述の「横書き句読点の謎」でも、横書き文書で「と、」、「と、」および「. と、」が公文書や一部の雑誌、九州大学内のニュース、学会誌などでどのように使われているかの例(1995年現在、九州大学の図書館蔵書)が紹介されている。雑誌では、工業写真・航空ファン・日経サイエンス・無線と実験・月刊天文・月刊ASCIIなど11誌が調査対象になっているが、いずれも研究者向けのいわ

ゆる堅い雑誌ばかりである。これらは、一般消費者はあまり読まないものと筆者は思う。

以下は筆者の調査結果である。雑誌であるから、ほとんどのものに広告がある。本文の句読点は「と、」、広告は「と、」、あるいはその逆で書かれているような場合もある。通常、広告の句読点表記は雑誌の発行元の表記規定によらず、広告主から提供されたものをそのまま掲載するので、句読点の種類はもちろん、仮名漢字・フォントなど表記は本文のものと一致しないことがある。したがって、広告部分は抜きにして調査した結果である。調査した194誌のうち、文学系のものの多くは縦書きである。図3にある15誌は、全ページが縦書き(広告以外の横書きが認められない)なので、本調査から除外した。

##### 広告以外すべて縦書き (15誌)

【凡例】雑誌名[発行所] 雑誌名50音順 \*\*：広告も縦書き

角川短歌[KADOKAWA] 月刊柳柳[新葉館出版] 現代小説[講談社] 公評[公評社]\*\* シナリオ[日本シナリオ作家協会] 小説新潮[新潮社] 小説すばる[集英社] 新潮[新潮社] すばる[集英社] 図書[岩波書店] 俳句[KADOKAWA] 放送レポート[大月書店]\*\* みすず[みすず書房] 文学[岩波書店] 文藝春秋

図3 全文縦書きの雑誌(調査対象外)

上記の15誌を除き、本文中に少しでも横書きのある179誌(100%)を、使用されている句読点の種類で分類した。結論からいうと「と、」を使用していたものが173誌(96.6%)で、断然トップである。この内訳を図4に示す。ほとんど縦書きでグラビア写真の説明だけが横書きというような雑誌もあり、それらには\*を付けた。逆に、全文横書きというのも数誌あり、それらには○を付けた。

##### 。と、(173誌)

【凡例】雑誌名[発行所] 雑誌名50音順

\*：横書きが少ないもの ○：全部横書き

ArmsMAGAZINE[ホビー・ジャパン] idea[誠文堂新光社] AERA[朝日新聞出版] AERA with Kids[朝日新聞出版] アサヒカメラ[朝日新聞出版]\* anan[マガジンハウス] いきいき[いきいき] いぬのきもち[Benness] Wedge[ウエッジ] VOGUE[コンテナスト・ジャパン] 栄養と料理[女子栄養大学出版部] SF マガジン[早川書房]\* ESSE[フジテレビジョン] NHKためしてガッテン[主婦と生活社] ELLE DÉCOR[ハースト婦人画報社] 演劇界[演劇出版社]\* 演劇ぶっく[えんぶ]\* オール読物[文藝春秋]\* OZ magazine[スターツ出版] おとなの週末[講談社] オレンジページ[オレンジページ] 音楽の友[音楽出版社] CARandDRIVER[カーアクトドライブ社]\* Casa BRUTUS[マガジンハウス] 隔週刊つり情報[辰巳出版] 家庭画報[世界文化社] キネマ旬報[キネマ旬報社]\* GALLERY[ギャラリーステーション] CanCam[小学館] (NHK テレビテキスト)きょうの健康[NHK 出版] (NHK テレビテキスト)きょうの料理[NHK 出版] ku:nel[マガジンハウス] COURRIER JAPON[講談社] 次ページへ



前ページより クジュアル[ぶんか社] 暮らしの手帖[暮らしの手帖社] CREA[文藝春秋] クロワッサン[マガジンハウス] 群像[講談社]\* 芸術新潮[新潮社] GOETHE[幻冬舎] 月刊 AQUA LIFE[エムピージェー] 月刊 AIRLINE[イカロス出版] 月刊 OLmanual [研修出版]\* 月刊ガパナス[ぎょうせい]\* 月刊碁ワールド[日本棋院]\* 月刊自家用車[内外出版社] 月刊シルバーセンター[公益社団法人シルバー人材センター事業協会] 月刊新聞ダイジェスト[新聞ダイジェスト社]\* 月刊TVnavi[産経新聞出版] 月刊邦楽ジャーナル[邦楽ジャーナル] 月刊 BOSS[経営塾] 月刊 HobbyJapan[ホビージャパン] 月刊 rockin'on[ロッキング・オン] 健康[主婦の友インフォス情報社] 現代詩手帖[思潮社]\* 現代の図書館[日本図書館協会] 建築画報[NPO法人建築文化継承機構] 航空ファン[文林堂] GOLD[世界文化社] COTTON TIME[主婦と生活社] Como[主婦の友社] Saita(咲いた)[セブン&アイ出版]\* SAPIO[小学館]\* サライ[小学館]\* サンデー毎日[毎日新聞社]\* 散歩の達人[交通新聞社] シアターガイド[モーニングデスク] CD Journal[音楽出版社] JJ[光文社] JTB時刻表[JTBパブリッシング] jazzLife[ジャズライフ] じゃらん[リクルートホールディングス] 週刊朝日[朝日新聞出版] 週刊エコミスト[毎日新聞出版] 週刊金曜日[金曜日] 週刊新潮[新潮社本社]\* 週刊ダイヤモンド[ダイヤモンド社] 週刊東洋経済[東洋経済新報社] 週刊文春[文藝春秋] 自遊人[自遊人] 住宅建築[建築資料研究社] (NHK テレビテキスト)趣味の園芸[NHK 出版] 将棋世界[日本将棋連盟]\* 小説推理[双葉社]\* 新建築[新建築社] 新潮 45[新潮社]\* SWITCH[スイッチ・パブリッシング] (NHK テレビテキスト)すてきにハンドメイド[NHK 出版] Stereo[音楽之友社] STORY[光文社] 住まいの設計[扶桑社] 墨[芸術新聞社] 正論[産経新聞社]\* 世界[岩波書店]\* 装苑[学校法人文化学園文化出版局] 壮快[マキノ出版] ヲトコ[木楽舎] DIME[小学館]\* ダイヤモンド・サイ[ダイヤモンド社] ダ・ウインチ[KADOKAWA] 旅の手帖[交通新聞社] たまごクラブ[Benesse] dancyu[プレゼント社] 地球環境とエネルギー[日本工業新聞社] ちくま[筑摩書房]\* CHANTO[主婦と生活社] 中央公論[中央公論新社]\* DVD&ブルーレイレータ[KADOKAWA] DisNEY[講談社] デジタルカメラ[インプレス] 鉄道ファン[交友社] 天然生活[地球丸] トウパ[学研パブリッシング] Tokyo Walker[KADOKAWA] 東京人[都市出版] 陶工房[誠文堂新光社] 特選街[マキノ出版] 図書館雑誌[日本図書館協会] NATIONAL GEOGRAPHIC[日経ナショナルジオグラフィック社] 日経 WOMAN[日経 BP 社] 日経エンタテインメント[日経 BP 社] 日経おとなのOFF[日経 BP 社] 日経ソフトウェア[日経 BP 社] NIKKEI Top Leader[日経 BP 社]\* 日経パソコン[日経 BP 社] 日経 PC21[日経 BP 社] 日経ビジネス[日経 BP 社] 日経マネー[日経 BP 社] Newsweek 日本版[CCC メディアハウス]\* ねこのきもち[Benesse] non-no[集英社] PIPERS[杉原書店] Hanako[マガジンハウス] 花時間[KADOKAWA] 母の友[福音館書店] 美スト[光文社] Pパピルス[幻冬舎]\* 美術手帖[美術出版社] 美術の森[生活の友社] ひととき[ウェッジ] ひとり暮らしをとことん楽しむ[主婦と生活社] ひよこくらぶ[Benesse] FASHION NEWS[INFAS パブリケーションズ] FIGARO japon[CCC メディアハウス] 婦人公論[中央公論社]\* FRaU[講談社] BRUTUS[マガジンハウス] プレゼント Family[プレゼント社] 文藝春秋[文藝春秋]\* Pen[CCC メディアハウス] Voice[PHP 研究所]\* 望星[東海教育研究所]\* 本の雑誌[本の雑誌社]\* Mac Fan[マイナビ] 丸[潮書房光人社] WiLL[ワック出版]\* ミセス[文化出版局] MUSIC MAGAZINE[ミュージック・マガジン]

みんなの図書館[教育史料出版会] MEN'S CLUB[ハースト婦人画報社] MEN'S NONNO[集英社] Motorcyclist[八重洲出版] Motor Magazine[モーターマガジン社] 優駿[日本中央競馬会内「優駿」編集部] UP (University Press)[東京大学出版会]\* ゆうゆう[主婦の友社] Rcmagazine[八重洲出版] 料理王国[CUISINE KINGDOM] 歴史街道[PHP 研究所]\* 歴史読本[KADOKAWA]\* ROBOCON MAGAZINE[オーム社] わかさ[わかさ出版] 私のカントリー[主婦と生活社]

図4 横書きに「.と、」を使用している雑誌

本調査の前には、科学系とくにコンピューター系や建築系などは「.と、」と「.と、」が多いであろうと予測していたが、これらの雑誌のほとんどは、「.と、」が使用されていた。

ところで、「航空ファン[文林堂]」という雑誌は、「横書き句読点の謎」でも今回の筆者の調査でも偶然調査対象に含まれていた。この雑誌は、「横書き句読点の謎」(1995年当時)では、「.と、」を使用している書籍の中にあっただが、今回の調査では、「.と、」を使用していた。この変更は興味ある事実である。

次に、少数派の3つのケースを報告する。

「.と、」を使用している3誌(1.7%)を図5に示す。学会論文に多く見られる「.と、」を使用している2誌(1.1%)を図6に示す。最後に、本文中に「.と、」と「.と、」を混在させているものが1誌(0.6%)あった。これを図7に示す。

。と、(3誌) 【凡例】雑誌名[発行所] 雑誌名50音順
日経サイエンス[日経サイエンス社] Newton[ニュートンプレス] BIRDER[文一総合出版]

図5 横書きに「.と、」を使用している雑誌

.と、(2誌) 【凡例】雑誌名[発行所] 雑誌名50音順
環境と公害[岩波書店] 天文がイト[誠文堂新光社]

図6 横書きに「.と、」を使用している雑誌

。と、。と、混在(1誌) 【凡例】雑誌名[発行所]
レコード芸術[音楽出版社]

図7 横書きに「.と、」と「.と、」を混在使用している雑誌

以上のように、雑誌での横書き部分で使用されている句読点の種類は、圧倒的に「.と、」である実態が明確になった。

## 6. 学校の教科書

3項で触れた文部省発信の決め事の大きな目的のひとつであった教科書は、現在どのようになっているかを調べてみた。手近なところで、筆者の小学生の孫から、横

書きが多そうな算数と理科の教科書を借りて、見たところ、完全に文部省の規則に従った「。と、」が使用されていた。手書きの横書き文を挿絵的に掲載している場合などは、「,」のように、ことのほかコンマを大きく目立たせているように感じられる所もある。図8は小学3年生用の理科の教科書<sup>[13]</sup>の抜粋である。

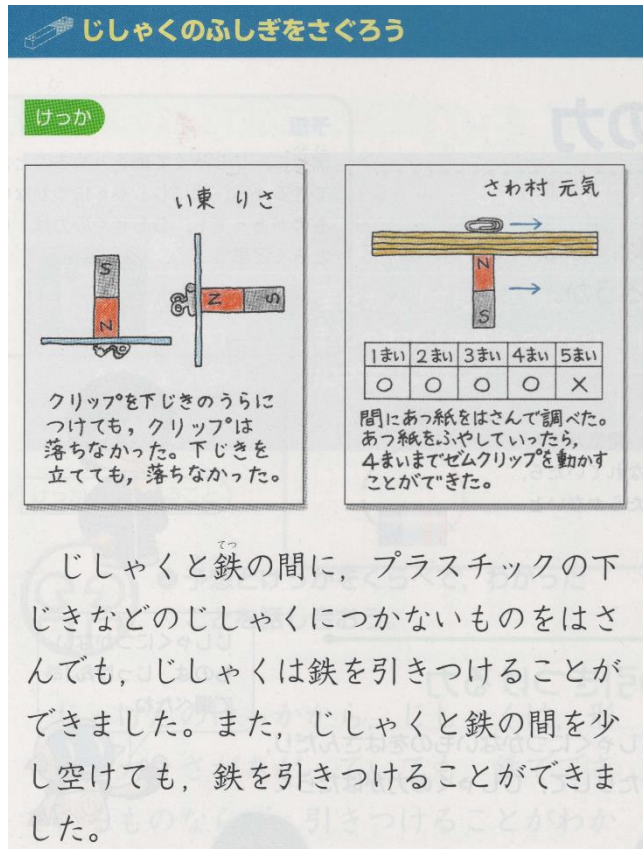


図8 「。と、」が使用されている小3理科の教科書(部分)  
ここでは、確かに「。と、」が使用されているが、たった2冊を見ただけで結論を出すのは心もとない。

東京神田神保町にある三省堂書店の6階売り場には、小1から高3までの教科書、参考書、ドリル(練習帳)、図鑑、辞書、児童書(絵本、偉人伝記や物語)などがそろっている。筆者は、そこで1時間ほどかけて実態調査を敢行した。

その結果を次に示す。すべて、横書き部分のことである。

- (1) 教科書は、小1から高3まですべて「。と、」である。
- (2) 参考書は、ほとんどが教科書と同じ「。と、」。

[例外] ぶつりの123[ソフトバンク クリエイティブ]

- (3) 図鑑は、小学館とポプラ社は「。と、」、学研は「。と、」。

- (4) 絵本は、ランダムにチェックした10冊全部が「。と、」。このことから、すべての教科書およびその補助的に使わ

れるほとんどの参考書は、「。と、」が使用され、読み物に近くなるにしたがって、「。と、」の使用率が高まることが分った。

われわれ大人は、学校では、子供たちに横書きでの句読点は「。と、」だと教育しながら、家庭など学校以外のところでは(といっても図鑑や絵本などは学校の図書館にも置くことが推奨されているものが多い)、「。と、」が多用されている本を読ませるといふ、彼らに矛盾していることを強いているのである。

教科書が、読点に「,」を使い続けているのは、旧文部省の決め事が変更されないからである。筆者は社会人として改めて読点に「,」が使われているのを見ると、違和感(何かギスギスした感じ)を感じる。そう感じる人は筆者の周囲にもけっこう居る。一般社会ではかなり以前から、横書きで読点に「,」を普通に使っている。いまやそれは圧倒的な割合である。それにもかかわらず、なぜ文部科学省は、見直しをしないのであろうか。おそらく世の中が変わっているのは承知していても、変更することによる教育現場、広くは出版を含めた教育産業における混乱を避けたいのであろうと筆者は臆測する。そもそも、文部省が横書きの句読点に「。と、」を採用すると決めた背景は何であったのであろうか。戦勝国の国語である英語に半分だけ義理立てして読点を「,」とし、「。」は温存したのではないだろうか、と筆者は思う。

いずれにしても、学校で教えることと一般社会のものと違うのは、よくないことである。

## 7. TC協会の場合

TC協会では、どの種類の句読点を推奨しているのだろうか。日本語スタイルガイド<sup>[14]</sup>における記載を見よう。

《引用開始》

### 1.3.3 記述の記号・符号の表記

記述の記号・符号は、区切り、繰り返し、連続、引用などの目的で使われる。

表 1.7 に、使用頻度の高い記号・符号の一覧を示す。

表 1.7 記号・符号の表記

記号・符号	呼び名	意味
。	句点	文の終わりを示す。
,	読点	文の途中の切れ目、同格の語句の並列に使う。
.	ピリオド	見出しの項番(例: 2.3.7)、小数点、略語などに使う。

		横書きの文書で句点として使うこともある。
,	コンマ カンマ	数字の位取りに使う。横書きの文書で読点として使うこともある。

……中略。

### 2.8.1 句読点を適切に使用する

日本語では、句読点の使い方に絶対的なルールはないが、適切に使用することで、表記に統一感を持たせ、文章が読みやすくなる。

読点には点(、)とコンマ(,)が、句点には丸(。)とピリオド(．)がある。どちらを使うかを決め、統一する。技術文書や論文などではコンマとピリオドを使用することもあるが、ビジネス文書や一般消費者向けの文書では、点(、)と丸(。)を使う。

以下に、句点の一般的な使い方を示す。……以下省略。

(注: 下線は筆者による)

《引用終了》

**日本語スタイルガイド**の発行元であるTC協会は、句点は「。」だが、マニュアル(＝一般消費者向け文書)における読点には「,」よりも「,」を使うのがよいと規定している。もちろん、**日本語スタイルガイド**は全文にわたり横書きで、使用されている句読点は「.と、」である。

## 8. 読点には「,」が最適

筆者は以下の理由から、製品マニュアルだけでなく、一般の文書も横書きの場合、句読点には「.と、」を使うべきだと考える。

- (1)既に一般社会において、横書き文中の句読点には「.と、」が圧倒的な割合で使用されている。「.と、」はもとより、「.と、」はまったく少数派であり、これらが句読点に使われていることに違和感(ストレス)を覚える人さえいる。ちなみに、MS Word では、横書きの句読点のデフォルト値は「.と、」である。
- (2)ワープロソフト(例:MS Word)や表計算ソフト(例:MS Excel)を使って、縦書き⇔横書きの変換をする場合、句読点の種類が「.と、」で統一されている方が簡便である。また、縦書きと横書きが混在する文書(雑誌など)では、縦書き用の句読点にそろえて、横書きにも「.と、」を使用する方が、統一感がある。
- (3)機械翻訳などの文書処理をする場合、横書き日本語文中の句読点に「.」や「,」が使われていると、「.」は、句点なのか、あるいは小数点や「U. S. A.」のような略称を示すために使ったものか誤認識するリスクがある。また、「,」は読点なのか、¥12,000のよ

うな数字の桁区切り符号なのかを誤認識するかもしれない。

- (4)なにより、旧文部省がそう決めたからという以外に、横書き日本語で、読点を「,」にしなくてはならない積極的な理由が見当たらない。

これらの諸点から、横書きでも「.と、」を統一的に句読点として使うことが、読み手にも書き手にも一番ストレスが無いのである。

もちろん、現在のJIS Z8301や学会の論文投稿規定のように表記規則が規定されているような場合は、当然それに従わなくてはならない。筆者が言いたいのは、特に定まっていなかった場合のことである。

とはいえ、文部科学省も工業界も学会も、出来ることなら、規則を変える努力をした方がよいと筆者は考える。

## 9. 終わりに

文学作品など情緒的なものは別にして、一般文書や製品マニュアルで、人に何かを伝えようとするとき、書き手は、正確に、過不足なく、早く相手に内容が伝わるような努力をしなくてはならない。「正確に」というのは、一般文書でもマニュアルでも最も重要なことであるが、「過不足なく」と「早く」というところは、方法と程度が問題になる。どうやって、この問題を克服するかには知恵を絞らなくてはならない。

文章よりも図の方が便利な場合もある。例えば、どんなに正確な地図でも、それが見る人にとって向きが違くと、かえって不便になってしまうことがある。実際の景色と、上下逆に掲示された街角の地図を見て、目的地に対して逆行してしまう場合すらある。そうならないように、どうせ作る地図なら、掲示する場所にあわせたものの方がよいに決まっている。

製品マニュアルは、当該製品の正しい使用法を、正確かつ早く読み手に伝えるのが使命である。文章部分は、読み手が少しでも、文の内容の把握に集中しやすくしておかなければならない。文章表現に使う、文体、用語、仮名漢字表記、項番の付け方、フォントの種類とサイズ、重要部分の強調方法、効果的なジャンプ方法等々の仕方が統一されていないと、読み手に余計なストレスをかけてしまう。ちょうど、使い勝手の悪い製品のようなものである。

日ごろ接している横書き文の句読点と同じ「.と、」が、製品マニュアルでも使われていれば、それだけでも読み

手に掛けるストレスが少なくなるのである。

\* \* \*

### 【参考文献】

- [1] 貝島良太、有限会社アトリエ・ワン、「下さい」と「ください」を正しく使い分けていますか？ —ほかにも「見る/みる」「言う/いう」「置く/おく」などは？— **TCシンポジウム'09論文集**、2009 pp.1-5
- [2] 貝島良太、有限会社アトリエ・ワン、3か所？3ヶ所？助数詞の「ka」を正しく表記していますか？ **TCシンポジウム'10論文集**、2010 pp.1-5
- [3] 貝島良太、有限会社アトリエ・ワン、ら抜き言葉を考察する あなたは「食べれる」派？「食べられる」派？ **TCシンポジウム'12論文集**、2012 pp.17-21
- [4] 貝島良太、有限会社アトリエ・ワン、句点と閉じ括弧の考察 —「おはよう。」か、「おはよう」か—、**TCシンポジウム'13論文集**、2013 pp.36-43
- [5] 貝島良太、有限会社アトリエ・ワン、接続詞を考察する —表記はひらがな？漢字？接続詞で短文化—、**TCシンポジウム'14論文集**、2014 pp.48-56
- [6] 三省堂「スーパー大辞林3.0」2007＝三省堂「大辞林 第2版」松村明編、1995 pp.724
- [7] 日立デジタル平凡社(現日立システムアンドサービス)、電子版「世界大百科事典」©1998-2000
- [8] 大蔵省印刷局「言葉に関する問答集 総集編」文化庁 1995 pp.731-740 (横書きについては pp.740)
- [9] 小学館「句読点、記号・符号活用辞典」2007 pp.xii-xiii (横書きについては pp.xiii)
- [10] 第一法規「文部省用字用語例」文部省 1981.12、pp.257-265 (横書きについては pp.264)
- [11] 日本規格協会「規格票の様式及び作成方法 JIS Z8301」日本工業標準調査会審議 2008、pp.57
- [12] 九州大学 渡部善隆著「横書き句読点のなぞ」  
<http://yebisu.cc.kyushu-u.ac.jp/~watanabe/RESERCH/MANUSCRIPT/OTHERS/YOKO/ten.pdf>
- [13] 啓林館「わくわく理科3」pp.112
- [14] 一般財団法人テクニカルコミュニケーター協会「日本語スタイルガイド」2009 pp.55、75-76

有限会社アトリエ・ワン (Atelier Bow-Wow)

取締役 兼 **SuperHT<sup>3</sup>** 事業室長 貝島良太

e-mail: rkaijima@bow-wow.jp

URL: <http://www.bow-wow.jp/sht3/>